

## 3月6日 第4回所長講話『「歴史」は過去のこと?』

月に1回程度のペースで実施している所内研修の中の「所長講話」の第4回目を3月6日に行いました。

## 【所長講話の主な内容】

○はじめに

1 「琉球王国時代の行政区画」及び「沖縄県現行市町村区分図」をみる

(1) 琉球王国時代の行政区画をみて

- ① 間切を答えよう
- ② 解答・読み方確認
- ③ 1枚の地図から「なぜ?」を見つける

(2) うちな一世の移り変わり

① 外的な要因に左右されてきた琉球

うちな一世 1609年まで(第二尚氏前期まで)

1609年(薩摩が来る) ※琉球王府と薩摩に二重に支配

大和 1879年(廃藩置県)

アメリカ 1945年(戦後)

大和 1972年(復帰)

② 沖縄県の歴史

○小さな集団 → 大きな集団 → 国

○中国皇帝の力を借りて認められたい。

「尚」という名は皇帝に認められたという証

③ 海外貿易と琉球

○小さな島が国として維持できるのは貿易があったから

2 「沖縄の五偉人」

(伊波普猷)

「深く掘れ 己の胸中の泉 余所たよて 水や汲まぬごとに」

(1) 儀間真常…産業の恩人

(2) 羽地朝秀…琉球最初の歴史書『中山世鑑』、羽地仕置

(3) 程順則…『六諭義』、琉球最初の学校「明倫堂」

(4) 蔡温…琉球を代表する三司官(政治を話し合って決める人)

(5) 宜湾朝保…和文学 歌集「沖縄集」「沖縄集二編」

○終わりに

地元に誇りを持たせるには、具体的にどこが優れているのかを伝えること



## 【教育研究員の感想】(研修日誌から)

今日の所長講話では沖縄・琉球の歴史について勉強することができました。学生時代に日本史や世界史は勉強しましたが、沖縄の歴史についてはあまり記憶に残っていません。研究所にきて宿泊研修での東御廻りや首里城見学、クラブでの三線や琉球舞踊等、沖縄の文化に触れる機会が多く、文化と関わりの深い歴史にも興味が出てきたので、今回の講話で勉強することができて良かったです。

地図を使って間切を考えていく問題では分からないところが多く、自分の地域もすべては答えられませんでしたが。現在の地図もいただいたので、昔と見比べながらどうして合併等の変化が起きたのかを調べることもおもしろそうだと感じました。資料を通して日本と琉球の歴史を見比べることができ、この時代は琉球ではこんなことが行われていたんだと分かりやすく学ぶことができました。資源のない小さな島が1つの国としてやってこれたのはどうしてなのか。先人達の知恵から学ぶべきことがたくさんあることを感じました。今後も沖縄の歴史、文化について調べていきたいと思います。

上原勝晴所長、学びや気づきの多い講話をありがとうございました。

(稲嶺あゆみ)

今日の所長講話は、琉球王国時代の行政区画にある間切名を書き込むことから始まりました。三和校区が3つの間切りに分かれていたという話を以前聞いたことがあったので、それをヒントに糸満市側の答えを書きました。書き込みながら見ると、島尻はたくさんの間切があることに気づきました。また、離島には間切のないところもあることをこの地図を見て初めて知りました。琉球史は学校で習う程度の知識しかなく、詳しくは知らないのですが、東御廻りで巡ったところを思い出しながらグスク時代や尚氏時代のことを聴きました。貿易があったから小さな島も国として成り立っていたことや中国との深い関わりを聴いて驚きました。昔から他国や島との交流が盛んだったと聴いてはいましたが、貿易が国を維持できるくらいのものだとは思っていませんでした。また沖縄の五偉人についても話されていましたが、様々な改革や普及に努めた人たちのおかげで今の沖縄の暮らしに繋がっているのだと思いました。他の歴史人物のことも調べてみたいと思いました。(安座名有里)

歴史の中で沖縄の置かれている立場が、外的な要因で変わっていたことが分かりました。一国の琉球王国として存在していた時代には、巧みな外交で中国やアメリカ、ヨーロッパなどの国々と貿易や親交があったことや平和的解決に向け知恵を働かせていたことを聞くと沖縄の先人のすごさを感じました。沖縄県は沖縄に関する本がたくさん出版されていることも聞きました。本を読む際には、出典がどこなのかをしっかりと把握することの大事さも話されていました。記事を見極められる目も養いたいと思いました。

Think Globally Act Locally。考え方は世界的に、行動は地元からの言葉どおり、地元を向け、しっかりと見据えることで地元愛も育まれるものだと実感しました。

沖縄の五偉人はしっかりと調べて、自分でも説明ができるようになりたいと思います。うちなー？(沖縄?)について考える時間が持てました。上原勝晴所長、ご講話ありがとうございました。

(勢理客貴之)

初めの問題で琉球王国時代の島尻の間切りの名称が半分以上答えられませんでした。今の市町村の境界線との違いもあり興味深く感じました。一枚の地図から色々な授業ができることが分かりました。

次に沖縄の歴史の概要を学んだのですが、はっきり理解していなかったことも多くありました。

伊波普猷の言葉はニーチェの「足下を掘れ、そこに泉あり」に似ているので後で調べた所、翻訳したということが分かりました。五偉人の宜湾朝保以外は名前は分かっていたのですが、説明がちゃんとできないので子ども達に伝えていくためには教師である自分がまず、学ばないといけないと思いました。

郷土に誇りを持たせると言うが、具体的にどこが優れているのかを伝えること、昔の琉球は中国の明王朝に認められて権威付けをしていましたが、教師も子どもを認めてあげることが大切だということが分かりました。(比嘉俊雄)

何回か予定されている所長講話の中で、まさか専門教科であった社会と関連したお話が聞けるとは思ってもいませんでした。お話をしている上原勝晴所長の姿を見て、中学生を前にして、こんな感じで授業をされてたんだなと想像しながらお話を聞いていました。私は歴史が苦手です。しかし、研究所に来てからというもの、所長が港川遺跡のお話や、アイデンティティ、最近では自己決定権のお話等される中で、うちなーんちゅとして考えなければならないことを折に触れお話して下さったと思います。「ヤイマ」「イージマ」「ウンナ」「ウルカ」は私には聞き馴染みのある呼び名になっているのも、遙か琉球王国時代から先人達から受け継いできた証拠だからだと思います。「間切」という言葉を初めて知り、現在の市町村の呼び名との比較は興味深く思いました。琉球時代の沖縄は、強かにその時代を生きてきたのだという印象を受けました。私達はその強かさをきっと受け継いでいる気がします。過去を知ることには現在を知ることにつながると感じました。あんなに生き生きと熱く語られる所長もまた、ロマンを大事にする人だろうと思いました。今日は所長の社会の授業を受けることができて良かったです。(古謝栄子)